

あいち病害虫情報 最新情報

令和4年6月17日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

梅雨入りは平年より8日遅い

東海地方は6月14日ごろに梅雨入りしたと見られます。6月16日名古屋地方気象台発表の1か月予報によれば、向こう1か月の天候は、暖かい空気に覆われやすいため、気温は高く、平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されています。

イネいもち病（葉いもち）

BLASTAMを用いた葉いもち感染好適日の判定によれば、6月上旬以降、県内の複数地点で好適日となった日が4回ありました。好適日が連続して2回以上発生している地点もあります。今後のほ場での発生状況に注意し、初発生を確認したら適切に防除しましょう。特に葉いもちを対象とした育苗箱施薬をしていない場合は、葉いもちの早期発見、早期防除に心がけましょう。なお、本日発表の「イネいもち病（葉いもち）情報第1号」に葉いもち感染好適日の判定結果を掲載しましたので、参考にしてください。

イネ縞葉枯病

5月中旬から6月上旬にかけて県内23地点のムギ類ほ場から採取したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は3.22%（平年4.46%、前年2.63%）で平年並でした。しかし、西三河の一部地域では高い値となっています。「コシヒカリ」など本病に抵抗性がない品種では注意が必要です。詳細は、本日発表の「イネ縞葉枯病情報第1号」を参照してください。

イネ白葉枯病

昨年、尾張地域及び西三河の一部地域においてイネ白葉枯病が発生しました。昨年発生が多かったほ場では、出穂3～4週間前に防除を行いましょ。また、本病は、畦畔や水路に自生するサヤヌカグサが第一次伝染源であるため、畦畔除草を徹底しましょ。

トビイロウンカ等の飛来状況

トビイロウンカ及びセジロウンカは、梅雨前線の活動に伴い断続的に飛来します。どちらも5月下旬の本田調査では発生を認めておらず、予察灯においても誘殺されていません。また、日本植物防疫協会提供のウンカ飛来解析によると、6月17日の時点で本県へのトビイロウンカ及びセジロウンカの飛来に適した気象条件はありません。しかし、5月下旬に隣県の静岡県、6月10日に奈良県で誘殺が確認されています。ほ場での発生動向に十分注意するとともに、今後、本県が発表するウンカ類に関する情報を確認してください。

斑点米カメムシ類

予察灯において、ミナミアオカメムシやカスミカメ類が誘殺されています。ミナミアオカメムシは、コムギ収穫後、タデ科雑草やネズミムギ（イタリアンライグラス）で生息しています。また、その他の斑点米カメムシ類は、畦畔、土手及び休耕田などで出穂したイネ科の雑草で繁殖します。ほ場周辺の除草を徹底し、繁殖を未然に防ぎましょ。

果樹の病害

梅雨に入っています。降雨による病気の伝染に注意しましょ。

ブドウべと病は、20～22℃が発芽適温なので、この時期の降雨で急激に発生が拡大します。発病部位は見つけ次第除去し、適切に処分するとともに速やかに防除しましょ。

ブドウ晩腐病の病原菌の胞子は、6月から7月に最も多く飛散するため、この時期に降雨が多いと発生が多くなります。昨年発生が多かったほ場では特に注意し、発病果房は見つけ次第除去するとともに、防除を実施しましょ。

ナシ黒星病は降雨により胞子が飛散し、発生が拡大します。幸水では、この時期から再び果実が本病に侵されやすくなります。昨年多発したほ場では特に注意し、防除を徹底しましょう。

モモせん孔細菌病は風を伴った雨で発生が拡大します。風当たりの強いほ場では特に注意しましょう。本病の主な伝染源は枝病斑です。見つけ次第除去しましょう。品種によっては収穫が始まっていますので、農薬の使用にあたっては収穫前日数や周囲への飛散に注意しましょう。

カキの角斑落葉病菌及び円星落葉病菌の胞子は、6月上旬から7月中旬に最も多く飛散し、感染します。予防に重点をおいて、防除を実施しましょう。

チャノキイロアザミウマの発生に注意！

6月上旬にブドウ周囲のイヌマキ（防風垣）でチャノキイロアザミウマ生息調査（10新梢の払い落とし虫数）を行った結果、平年と比較してやや少ない状況でした。

しかし、黄色粘着トラップ（ブドウ及びカンキツほ場に設置）によるチャノキイロアザミウマ成虫の誘殺数は平年並の状況が続いています。

本種は軟弱な葉や新梢で増殖しますので、不要な枝は取り除くなど栽培管理に注意しましょう。ブドウでは、袋かけまでの防除を徹底しましょう。ウンシュウミカンでは、6月上旬から7月にかけて果梗部の被害が発生しやすくなります。

本種の防除適期は成虫の発生ピークです。表の発生ピーク予測日を参考に防除しましょう。

表 チャノキイロアザミウマ成虫の発生予測ピーク日

	愛西	南知多	名古屋	大府	豊田	岡崎	蒲郡	豊橋	新城	伊良湖	稲武
第2世代	6/14	6/14	6/8	6/10	6/13	6/15	6/12	6/12	6/17	6/13	第1世代 6/7
第3世代	7/6	7/7	7/1	7/3	7/6	7/7	7/5	7/6	7/9	7/6	第2世代 7/7
(前年)	7/6	7/5	7/1	7/1	7/5	7/6	7/3	7/4	7/10	7/3	(前年) 7/8
前年差	±0	2日遅	±0	2日遅	1日遅	1日遅	2日遅	2日遅	1日早	3日遅	前年差 1日早

各地のアメダス平均気温から予測。6月16日までは実測値を、それ以降は平年値（豊橋、大府は前年値）を用いて計算。前年の第3世代は、前年気温の実測値を用いて計算。

ナシヒメシンクイ

フェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数は平年並～やや多い状況です。今後は途切れなく発生し、世代数を重ねるほど虫の密度が高くなります。モモ、ナシでは果実が食害されますので、収穫前日数に注意して防除しましょう。

アブラナ科野菜のチョウ目害虫

キャベツなどのアブラナ科野菜の残渣は、秋冬作におけるコナガなどチョウ目害虫の発生源となります。収穫終了後は残渣を適切に処分しましょう。

ウイルス病の伝染源を減らしましょう！

施設トマト（促成・半促成栽培）の栽培が終了する時期です。タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病の病原ウイルス（TYLCV）、コナジラミ類はトマト黄化病（ToCV）を伝搬します。次作トマトが黄化葉巻病や黄化病に感染しないように、栽培終了後、施設を密閉してコナジラミ類を死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

施設キュウリでは、ミナミキイロアザミウマがキュウリ黄化えそ病の病原ウイルス（MYSV）を伝搬します。次作キュウリが黄化えそ病に感染しないよう、栽培終了後、施設を密閉してミナミキイロアザミウマを死滅させ、発病株は適切に処分しましょう。

イチゴの病害虫

炭疽病は、育苗初期からの予防を主体とした防除が重要です。親株床は雨よけ等によって伝染を防ぎ、ランナー伸長期から育苗終了まで予防剤で定期的に防除しましょう。罹病株は見つけ次第直ちに抜き取り、適切に処分しましょう。

ハダニ類は乾燥条件を好みます。空梅雨の場合、好適な条件となるので、親株床での発生状況に注意し、防除を徹底しましょう。

トマトキバガ

トマトやナス、ばれいしょ等のナス科作物を加害する侵入害虫です。国内では令和3年に初発生が確認され、その後は九州地方を中心に侵入警戒トラップでの誘殺が確認されています。愛知県での発生は確認されていませんが、今年5月には和歌山県で誘殺が確認されており、注意が必要です。葉に「えかき」症状（ハモグリバエ類によるものより幅広い食入痕）や果実への食入（数mm程度の小さい穴）など発生が疑われる症状がありましたら、お近くの農業改良普及課や病害虫防除室などへご連絡ください。

トマトキバガの詳細については、各県から発表されている特殊報や、農林水産省Webサイトに公表されている以下の資料を参照してください。

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kaigai/attach/pdf/index-3.pdf

サツマイモ基腐病

平成30年に国内で初確認され、現在25都道県で確認されています。これまで愛知県での発生は確認していませんが、昨年は近隣の岐阜県、静岡県、長野県でも発生しており注意が必要です。サツマイモ基腐病の発生生態や防除対策に関する技術情報の詳細は、農研機構 Webサイトに公表されている以下のマニュアルを参照してください。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和3年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/151859.html

キクの病害虫

白さび病は例年、梅雨期に感染が多くなります。発病が見られるほ場では、被害葉を切除して適切に処分するとともに、同一系統薬剤の連用を避けて防除しましょう。

予察灯、フェロモントラップなどの各種調査データは、ホームページ「あいち病害虫情報」（アドレス：<https://www.pref.aichi.jp/site/byogaichu/index.html>）を参照してください。

問合せ先 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室 TEL 0561-62-0085 内線471 FAX 0561-63-7820
